外國方　田中廉太郎（家來二人）　杉田晋助（家來一人）　金坂貫之助

監察方　富永一造　原又吉

江川方手代　上村井善平　川崎俊平

八丈島年寄　作次郎

雇醫　阿部將翁

水夫　四十九人

火焚　十四人

大工　一人

鍛冶　一人

惣人數九拾貳名

午後三時廿分品海出帆同六時五十分浦賀港ニ入ル

同日咸臨丸ニモ尾勢志三ケ國ヨリ爲測量派出スル者幷荷蘭國行之者ヲ搭載シ同斷仝艦長ニハ矢田堀景藏氏也同月廿四日朝浦賀港出船同夕六時豆州下田ニ着乘組之者多人數痲疹病ニ付同港ヨリ八月二日迄滯泊

本船航行需用ノ物品積込中之處廿一日ヨリ病者漸次ニ增ス此節痲疹流行船内ニ傳遷シ日一日ニ蔓延シ廿四日ニハ水夫患者拾九人ニ至ル士官之分モ既ニ五人同症ノ兆アリ之ニ由テ看病夫不足シ水夫之ヲ助クル等ニテ船内業務煩劇急速出

帆致シ難キ旨江戸海軍所ヘ書簡ヲ送達セリ此地亦陸上家々同病ニ罹ル者夥多クシテ奴婢之輩モ感シ下宿スル者少ナカラス是ヨリ益〻病勢熾ンニシテ當分消滅ニ赴ク可キ景況ニ無之ニ付不得已數十日ノ滯泊ニ及ヘリ漸クニシテ七月十八日爲療養上陸セシ者ヲ悉皆歸船セシムルニ到レリ廿日正午蒸氣罐ニ點火午後一時仝港出帆翌廿一日午後三時八丈島之内神港沖ニ拋錨ス深廿尋錨鎖卅五尋出ス

但八丈島土民ハ此艦不意之入帆ヲ預報セン爲メ同島ヨリ大約距離二里程隔リシ處ニテ空砲三發シ續キテ螺貝ヲ吹キ鳴ラス夫ヨリ同島ニ向ヒ進ミシ處投鉛スルニ底ニ達セス如斯水深及ヒ海底共分明ナラサル故頓テ相距ル「四五丁ノ處ニテ測鉛索ヲ垂下スルニ十八乃至十九尋ニシテ底質ハ黑色細砂ナルヲ探知シ得タリ爰ニ姑ク投錨ス則チ垂戸濱ノ前ナリ」是ニ於テ江川方上陸シ此邊暗熟之者一人陸ヨリ來ラ令ム問合候處此邊甚タ險惡今少シク水引クキハ只淺キ而已ナラス下底岩礁ナルヲ以テ固ヨリ暫クノ繫泊モ爲シ難シ猶神港ニ對スル沖ニ繰リ上ル時ハ充分安穩ナルヲ得スト雖モ先ツ可也ト之答ニ付即時沖之方ヘ駛進シ轉錨ス此夕六時外國方監察方上陸當艦士官ニモ此島爲測量西川寸四郎根津欽次郎上原七郎水夫三人勘定方望月七平同斷何レモ此島ニ滯留ス

夕七時後ニ至リ漸〻波高ク片時モ安カラサルニ付從今日數三十日ヲ過キテ可再渡積リ外國方ト期約シテ出帆ス翌廿二

日夕八時後房州館山灣ニ入ル錨泊所深八尋八月三日午後二時半浦賀ヘ向ケ出帆午後七時同港ニ入津同月九日此頃虎烈羅病追〻流行スルニ付之ヲ避ン爲メ泊所ヲ港口ヘ轉ス十九日午後一時半出帆廿一日午前四時後空砲二發シ五時十五分八丈島神港前ニ投錨深十七尋即刻先日ヨリ登陸シ在ル外國方監察方及ヒ爲測量留マリシ軍艦組共不殘歸船并募ニ應シ小笠原島ヘ移住願之該島農民三十八人乘組ム内女十五人是ハ夫婦配匹ナリ其外單身出稼之者八人

此島之現況右乘組シ島民ニ由リ見聞之儘一二左ニ記ス

八丈島産之婦人頭髮長キ「ヶ」ヶ六七尺其身立チテ髮毛ヲ已レノ足前ニ下垂シ夫ヨリ折リ延キテ餘レルヲ計ルニ多キハ一尺少キモ五六寸有リ何故ニ如此長髮ナルニヤ土地之氣候ニモ寄リ亦各自保護之厚キニモ因ル歟此佗異樣無キモ多分ハ畢生一孤島ニ居リ唯八丈アルヲ知リテ其佗アルヲ知ヲサル者ノ如シ同島製之燒酎酒ヲ船中ヘ持參セシヲ味ヒシニ酒氣頗ル烈ナルモ蕃薯ヨリ取リタル物ニテ其臭氣强シ此島ニハ砂糖稀レナル故同品ヲ與フルニ珍重スルヿ甚シ

午後七時十分拔錨同廿分ニ空砲五發ス廿四日潮流ノ爲メ大ニ東方ニ偏倚セシニ付午後一時半汽罐ニ點火シ廿六日朝七時父島二見港ニ入リ投錨深廿七尋此處海水清澄下底珊瑚石アル迄透明ニシテ青赤綠色等ノ魚類游泳スルヲ見得ル閑八月三日母島ヘ航行シ同島沖村之南濱ニ投錨深十二尋海底砂ナリ英人マツレト云フ者此島ニ居宅アリ五日朝八時廿分出

帆二時半父島二見港内南側扇ケ沛ニ投錨深九尋十四日當島滯在之齋藤源藏井口榮春等乘組ム十五日午前七時半出帆歸帆之途ニ就キ同四十分空砲十三發ヌ廿一日午後四時廿分浦賀港ニ達ス深十三尋

黑瀨ト稱スル潮ハ内地ヨリ小笠原島ニ至ルノ航路ニ横亘ス此回航行ニ於テハ前後往返共此海流限界ニ入リ大約三里程之間一晝夜僅ニ四里許ノ潮流ニシテ乘船者ニ潮流アルノ感覺ヲ起サシメサリシ尤其中央ニ到リシ頃ハ潮勢稍ヤ强クシテ潮行ノ方向ハ南東ナリ通常平均潮力十八里ト之由○痲疹流行後虎烈羅發病ニテ水夫三人火焚一人航海中ニ死去ス因テ父島母島ヘ埋葬ス

還時日々北風勁烈故ニ兩日滯泊廿四日朝六時半出帆同八時江戸灣ニ入ル定時碇泊所ニ投錨乘員一同歸府

此行ヤ痲疹及ヒ流行病災ニ遇ヒ加之漏罐之漏所アルト可及的石炭ヲ費サヽヲンヿヲ要シ大抵帆而已ニテ航走シタリ是レ航海日數ノ意外ニ增多セシ所以ナリ

小笠原島ヲ相建候碑文之義ニ付申上候書付

水野筑後守

服部歸一

今般私共小笠原島御開拓爲御用被差遣候ニ付而者同島之事ハ御國人ハいまた移住之者も無之當時外國人却而移住仕居候哉ニ相聞彼我所屬之差別發輝と分り兼候得共往古小笠原民部大輔初而見出ー候節

權現樣上意之趣ニ寄御屬島之趣木標建置其後延寶度巡見之もの大神社取建置候先蹤も有之彼方ニ而も小笠原島無人島おとと此方之稱呼襲用仕候事即何寄之現證ニ而御國屬島ニ紛れ無御座候得共後來ニ至り何樣之議論可有之も難計就而者彼地到着之上今般者石標相立右等之始末認め候文章爲鐫付候樣仕候ハヽ當時者勿論後來之確據ニも相成傍以可然奉存候右可然被思召候ハヽ碑文之儀者取調追而相伺候樣可仕奉存候依之此段奉伺候以上

酉十月

覺

伺之通相心得碑文早〻取調可被差出候事

扇浦へ取建候碑文

小笠原島新はりの記

伊豆のくふ八丈島の爻なみ北緯二十七度こゝのゑのみやこのひんかし四度二十七分すあたりてひろきせはきそこたくのしはありしを東照す神みれやのおん時文祿のふさと勞とはぬよ小笠原民部大輔貞頼をゆるしかうふまてわゑ犯そめしより此島なかくしるゑしとあ小笠原島といふ名称もさまひさりをまされと波路のいとあらけれハにやありけむはそしう渡まあよふ事もなくなりにゑ犯しを其後享保十三年にかの貞頼の後おりける官内貞往せちに申こひて

又さらに渡りたりしかとそのかみはおわなけさはにも
御ふとわさをくやおもしはんさしてきはくしき
をなもあらてなむなみしそもくかゝるはなれ島
よはあをとをもをちひむをのくによしをあらぬをいた
にらにさてのみあらんには風波をけしきわた中をゆき
かふ船路のたよりもよろしからさ光をはいかてこの度
をおふたる事なく新はりせよをれをてさ粉給ひて水野
筑後守忠德のぬしに服部歸一常純のぬしらに此事のをち
くつかさをら粉たまひぬをゝあるりよひてふのみつ
かひの人くををなむことおき
仰ふと沈かしてみいをすみなかよ船よそひしてなゝて
ともにお沈をゝをきんとなをかゝれはこのふをゆはとなま

粉給ふたをしに沈沖津島根の石よをさみあをふしおへよ
をゝをたをまひにをさなをたまはむとあるふとのよし沈文久
元年十二月のはしめよかしこまりうけなははりあ黒河
主水春村ふを決

亞米利加合衆國全權ミニストル
エキセルレンシー
ロベルトエッチフライン氏

以書翰申入候先般貴國前公使トウンセントハルリス氏申
入置候通我國屬島小笠原島再ひ開拓之ため外國奉行水野
筑後守目付服部歸一同島に差遣爲取調候處同島ニ者貴國
人子サ子ルセイポレ并セルマン國プレメン所生ニ而即今

英國民籍ニ加り居ルウイヨムアレンと申者兩人滯住いたし居候ニ付此度同島開拓之趣意并持地等其儘安堵せしむる趣等申諭候處當節島中ニ而別段引受取計候ものも無之諸事規則不相立銘〻不都合之趣申立候ニ付自今同島在住之者可心得規則并出入船之規則とも取極め書面相渡候處一同右ニ而安心いたしその規則を遵奉可致旨申立候始末筑後守歸一歸府之上委細申立たりよつて其許心得之ため別紙規則書寫貳通差進候就而者薪水食料を始め石炭其外必要之物品等追〻同所ニ貯蓄いたし置以來同島近海渡航之船〻便利を得せしめんとも右之趣貴國商船鯨漁船等ニも觸被置度依之別紙貳通相添此段申入候拜具謹言

文久二年八月

久世大和守

安藤對馬守

定

一外國人共是迄切開きし畑地ハ其儘安堵せしむといへとも自今者日本役所ニ申立差圖を請へき事

但地所讓渡さんとする時ハ是亦可受差圖候事

一漁業之場所ハ別段境界を不設日本人と打混し可相稼事

一山ニある材木類日本役人之許を得るよあらされハ伐取間敷事

但礦石類ハ掘取へからさる事

一山野之獸類食料之外不可獵取事

一嫁娶死亡出生之もの一〻日本役所ニ可及屆事

一向後在島之者ニ便り其本國又ハ他國より移住之外國人あらハ日本役所ニ訴出可受差圖事

但當分爲逗留差置ものあらハ是亦可訴出事

一外國人其本國ニ立歸り又ハ他邦ヘ轉住とるものあらハ日本役所ニ訴出可受差圖事

右之條〻文久二年壬戌正月於小笠原島水野筑後守服部歸一定之者也

小笠原島港規則

一諸國之商船鯨漁船等港內ニ碇泊之節者其國名船號船長之名頓數乘組人數并渡來之趣意早速日本役所ニ申立都而其役人之差圖ニ從ふへき事

一諸國之船〻出入港之船稅并輸出入之商稅者不及差出事

一港內碇泊之船〻者漁業ニ妨あるを以て不可發砲事

一港內出入之船〻水先案內之ものヘ定之賃銀を可拂事

一港內碇泊之船〻乘組之ものの上陸之上遊獵〜田畑を荒〜其外不法之ものあらハ召捕其船之船長ニ引渡相當之過料を可爲差出候事

一乘組人之內當島ニ在留〜或ハ一時滯在とる事を願ふものあらハ其段船長より申立役人之差圖ニ可從事

一渡來之船ニ便り立退候在島之外國人も同斷之事

右之條〻文久二年壬戌正月於小笠原島水野筑後守服部歸一定之もの也

以書翰申入候我南海小笠原島渡航中絶之處先般外國奉行水野筑後守目付服部歸一差遣再ひ同島を開拓し役人をも差置たり尤薪水食料を初め石炭其外必要之物品等追而者同所に貯蓄いたし同島近海渡航之船〻に便利を得せしめんとを右之趣貴國商船鯨漁船等にも編被置度依之此段申入候拜具謹言

文久二年十月

久世大和守
安藤對馬守

佛蘭西全權ミニストル

エキセルレンシー

トセンデベレクルに

阿蘭陀コンシュルゼネラール

エキセルレンシー

イカテウ井ツトルに

魯西亞全權コンシュル

エスクワイル

コシケウイチに

孛漏生國

エキセルレンシー

外國事務大臣に

何レモ同文言

葡萄牙コンシユル
エスクワイル
エトワルトカヲルクに

按スルニ小笠原島ハ大洋中ニ棊布シ蕞爾タル大倉ノ一粒ニ過スト雖モ遙ニ伊豆地方ニ對峙シ八丈諸島ヲ距ル甚遠カヲス隱然トシテ我カ南疆ノ藩籬タリ豈コレヲ度外視スヘケンヤ

文祿二年（千五百九十五年）信濃澤志領主小笠原民部少輔貞賴德川家康公ノ旨ヲ受豆州下田ヨリ出帆此島ニ到ルヲ始トシ因テ命アリテ小笠原島ト名ク其後元祿中ニ至リ再ヒ渡航センヿヲ乞フ者アリト雖モ許サレス承應中紀州橘商船難風ニ遭ヒ此島ニ至リ歸帆ノ上申立延寶三乙卯年（千六百七十七年）閏四月五日長崎住島谷市左衞門外三拾八人記章資給ヲ賜ハリ出帆此船ハ長崎奉行牛込玆鎭ニ命セラレ唐製ノ巨艦ヲ造リ乘組同年五月五日着船六月五日巡見相濟出帆同月廿二日下田ヘ歸帆享保中此島見分ノ者被遣候趣承及貞賴末孫小笠原宮內ヨリ渡海相願由緒分明ニヨリ願之通被差許人家無之ニ於テハ迫々民家引移シ可被下別段見分ノ者ハ遣ハサレ間敷旨ヲモ命セラル享保五庚子年（千七百二十二年）正月遠州荒井商人五兵衞船長左太夫水主八十八人至ル元文元丙辰年（千七百三十八年）濱町船持

善助等七人至ル同四己未年（千七百四十一年）正月堀江町船持善八船頭富藏拾人至ル天明五乙巳年（千七百八十七年）三月土佐赤浦商人儀七等七人至ル同七丁未年（千七百八十九年）十二月大坂北堀江米商人龜次郎船長儀三郎等九人至ル寛政元己酉年（千七百九十一年）六月薩州志布子浦商人三右衛門船長榮右衛門等八人至ル天保十己亥年（千八百四十年）十一月十日奥州氣仙郡小友浦庄兵衛船頭三之丞外四人難風ニ遭ヒ正月四日漂着同年三月廿四日下總銚子浦ヘ歸帆其他ハ五六年十一二年十七八年或ハ二十年在留便風ヲ得歸國申立ル旨以上舊記ニ見ユ抑當時我邦ノ船舶ハ嫂陋ニシテ風濤ノ險ヲ冒スニ足ラス又航海ノ業ハ一切コレヲ賤民倉父ノ手ニ委シ絶テ測量及其他ノ技術ヲ講セサルカ故往々魚腹ノ患ヲ免レサル、ハ理ノ當ニ然ルヘキナリ故ヲ以テ人々逡巡畏縮シ漸々其足跡ヲ此島ニ絶チ終ニ放棄シテ顧ルヿナキニ至レリ而シテ外人ノカリホルニヤ沿岸及布哇等ヨリ廣東地方ニ往來スル者日ニ蕃ク概此航路ニ由ラサルハナシ

千八百廿年（我文政二年）甲比丹ペ―セ―此島ニ至リ「アルソビスポ」之名ヲ命ス英ノ船卒二人隨意ニ爰ニ止ル此二人ノ者甲比丹ノ船發セシ後サント―イスニ趣キ米人二人デ子マルカ人一人タメハメハ三世ノ臣人男五人女拾人ヲ移シ己レモ共ニ無人羣島ニ居住セント計レリ千八百廿五年（我文政七年）英ノ甲比丹ヒユ―チユ此島ニ至リ英ノ所領トス土人ハコレヲ嫌ヒ此地ノ頭取ナル者其政事ヲ行ヒ

英ノ法ニ從フヲ惡ム翌年魯ノ甲比丹リユツケ此島ニ至リ領地トセントノ手立ヲナセリ又是班牙人ノ至リシ時ハ「アルゾビスポ」ト名付ケタリ千八百三十年（我文政十二年）米及歐人サント―イス島ノ男女數人ヲ伴ヒ到レリ千八百三十一年英ノ捕鯨船中ヨリ九人コヽニ住同州三年（我天保三年）亞ノ鯨船難船シ十二人此島ニ上リ内四人止ルミセルクユイントヽ云者ヘ―ル島徙民ノ詳記ヲ著ス此島ハサント―イスニ居ル英ノ領事官ヲヨヒ直ニフリタニヤノ政堂ヨリ防護ス英ニテ此土ヲ守ルヘキ兵士ヲ送ルニ決セハサント―イスノ交易半ヲ割テルロイトヘ移サント或人イエリ千六百年代ノ半ニ及ヒ日本ノ圖中既ニ此羣島ニ家ヲ營ミ村落ヲ成セルヲ載セタルアリ然ルニ

其民流移シ永ク傳ヲス五十年ヨリ六十年後ニシテ再以前ノ如ク無人島トスルハ何ソヤ

千八百五十四年（我嘉永六年）四月十日合衆國水師提督ペルリ我國碇泊中加比丹シヨイルロアボットニ命シ此島ヲ檢査セシメ又書ヲ本國ノ海軍省ニ寄セテ瀛船ノ碇泊所トセンヿヲ述フ又云當然此島ヲ領スヘキ國疑モナク日本ナルヘシ此地ヲ發明スル尤早ケレハ當今爰ニ住スル者當然是ヲ支配スルナルヘシ總テ他ノ記錄ハ右ニ引キタル千六百七十五年ノ發明ヨリ遙ニ後ノ「ナレハ尤早ク發明セシハ日本人ナリ故ニ英人早ク此島ヲ發明セシト云ヘカヲス（以上彼理日本紀行摘錄）此論極テ公平至當トスヘシ然ルニ今ヤ政府軍艦ヲ派シ開拓ニ從事シ以テ我カ藩籬ヲ固

フシ僅ニ外人ノ據有スル所トナヲサリシハ頗ル美舉ト稱スヘシト雖モ其事決シテ偶然ニ非ス此時我ニ稍海船ノ設ケアルニ由サヲンヤ是亦我邦ノ鋭意海軍ヲ振起セサル可ヲサルノ一例證トスルニ足ルヘシ

海軍歴史卷之十二

海軍歴史卷之十三

軍制改正之上

目録

軍制改正取調ノ命令
改正ノ親諭
兵備擴張ノ布令
將士資級ノ建議
職俸階級ノ取調
海軍編制ノ建白
江戸大坂兩港ノ警備
沿海艦隊ノ配置

富商ニ献金ヲ諭ス

安政中軍制改正之發令

海軍歴史卷之十三

軍制改正之上

軍役人數割兵賦取立之事

文久元辛酉年五月十一日

池田甲斐守

大岡豐後守

酒井壹岐守

松平出雲守

伊澤美作守

駒井山城守

海陸御備向并御軍制取調御用被仰付之

右於羽目之間紀伊守申渡酒井右京亮侍座

井上信濃守
木村摂津守
黒川備中守
服部歸一
大關肥後守
内田主殿頭
淺野伊賀守
小栗豐後守
川勝丹波守
勝麟太郎

同御用取調被仰付之

神保伯耆守
大井十太郎
山口信濃守
池田修理
塚原治左衛門
立田錄助

一壹役壹人召出御軍制御改正之

上意有之

右上意之趣ハ鎖國之御制度御一變被遊候上者御軍制も亦御一變不被遊候而ハ難相成義ニ付右御變革追〻可被仰出候間各一致一力を盡し

神君以來之御武威內外ニ布キ候樣一際可勵候之事

即日老中壹役壹人ニ演達之大意左之通

此度上意有之候段難有義ニ付銘〻報國之志を抽て一致丶力を盡丶御趣意を領丶迫〻被仰出候事柄徹底致丶候樣厚可被心懸との事

文久二壬戌年閏八月十七日周防守布達

方今宇內之形勢一變致丶候ニ付外國之交通も御開ニ相成候ニ付而者全國之御政事一致之上あらてハ難相立筋ニ候處御大禮等打續一新之機會を失ひ天下之人心居合兼終ニ時勢如是及切迫候次第深く御痛心被遊候ニ付上下擧而心力を盡丶　御國威御更張被遊度思召候尤環海之御國海軍を不被爲興候而者御國力不相震候ニ付迫〻御施設可被成候得共此儀者迫而被仰出ニ而可有之候右ニ付而者參勤之年割在府之日數御緩め之義迫而可被仰出候依而者常〻在邑致丶領民之撫育者申迄も無之文を興丶武を振ひ富强之術計厚相心掛銘〻見込之趣有之候ハゝ無伏藏申立候心得ニ可罷在旨被仰出候

右之通被仰出候事

海軍將士資級之義ニ付申上候書付

御軍制掛

海軍御建興之儀者當今第一之御要務ニ而無此上御大業ニ

有之御軍艦之製造方者莫大之御用途ニ而不容易之樣御座候得共一旦御仕法相立御用途出方等相辨ヘ候上者海外各國ニ被仰付候ともの於御國内御打建相成候共數十艘出來致ヘ候事不難義ニ御座候就中至而難キ者ハ右將士生育之義ニ有之候間先第一ニ天下之人心ゑゝゑ趣向致ヘ候樣御仕向有之候義肝要ニ御座候右將士義者學科も多端ニ有之極而難入而不易學而已ならず既ニ成業之上とても風濤之險を冒ヘ生死を一瞬ニ爭ひ常ニ對敵臨陣之想を致ヘ候義故格別之御優待無之候半而者如何樣御督責有之候とも危を避ケ安ニ就キ榮利ニ趣キ富貴を欲セるハ人情之常態ニ趣向仕候ニ付右資給之儀外國制度ニ本キ且陸軍將士と比較仕彼我折中致ヘ一定之制度別冊取調幷學科昇進之次第一冊取調差出候間速ゑ御家人御旗本ゟ其趣御示相成ゑとひ厄介之者ゑり共成業次第夫ゝ御役被仰付寄合万石以上たり共各將帥之學可心掛旨被仰出是迄其業ニ成熟仕候者其身材能を相撰其資格ニ不拘御拔擢相成各將士之任ニ當らヘめ候ヘ者天下人心翕然とヘて海軍ニ趣向仕數年を不出ヘて人材蕃育仕候樣可相成奉存候此段一同評議仕申上候

海陸二軍將士階級序

海軍	陸軍
御老中	
一 海軍總裁 西洋アドミラール	二 陸軍總裁 西洋フェルドマールシカルク

若年寄
三海軍副總裁
同ロイテナントアドミラール

駿府御城代ノ上
五海軍奉行
同ヒーセアドミラール
高五千石御役金三百兩
歳俸　三千元
職俸　四千元
航海俸　一万二千元
但是者平常も相受申候
右者海軍一隊即「一フロート」十二艘之將官ニ有之候

四陸軍副總裁
同ゼネラール

六陸軍奉行
同ロイテナントゼネラール
高五千石
歳俸　三千元
職俸　八千元

海軍

御勘定奉行ノ上
七御軍艦奉行
御老中支配
高三千石
御役金貳百五十兩

陸軍

騎兵組

八騎兵奉行
同
高三千石
西洋ゼネラールマヨール

同
歩兵組

九歩兵奉行
同
高三千石
同上

同
大砲組

大砲組者單行不致もの故奉行ハ無之
同上

西洋スコウトベーナフト
歳俸　二千四百元
職俸　三千二百元
航海俸　一万一千元
右者海軍分隊を指揮いたし候

西丸御留守居ノ上
御老中支配
十御軍艦頭
高二千石
御役金貳百兩
西洋カピテインテルセー
歳俸　一千八百元
職俸　二千四百元
航海俸　八千元より二千五百元迄
右者リニー船フレガット船コルヘット船並一等蒸氣船等一船之指揮いたし候

歳俸　二千四百元
職俸　五千五百元
右者「フリガーテ」隊「レジメント」三四隊相合する者之指揮致し候
同上

十一騎兵頭
同上
高同上
西洋ゴロネル
歳俸　一千八百元
職俸　四千元
右者一「レジメント」隊之指揮をいたし候
同上

十二歩兵頭
同上
同上
同上

御留守居番之上　御老中支配

十三御軍艦頭並　高千石　御役金百五十兩

西洋カピテインロイテナントテルセー

歳俸　千五百元

職俸　一千七百元ヨリ一千五百元迄

航海俸　三千元ヨリ千七百元迄

右者コルヘット船一等ブリツキ船一等二等蒸氣船等之一船指揮いたし候

十四騎兵頭並　高千石

西洋ロイテナントコロネル

歳俸　千五百元

職俸　三千五百元

右ハ半「レジメント」隊之指揮を致し候

同上

十五歩兵頭並　高千石

同上

右ハ一「バタイロン」隊之指揮を致し候

同上

十六大砲組之頭　高千石

同上

右ハ大砲一座「バッテレイ」但八挺之指揮を致し候

御使番之上　若年寄支配

十七騎兵總目付　高七百石

西洋マヨール

歳俸　千三百元

職俸　二千六百元

十八歩兵總目付　高七百石

同上

同上

新御番組頭之上　御軍艦奉行支配

十九御軍艦役　高四百俵　御役金百兩

西洋一等ロイテナント

歳俸　千二百元ヨリ九百元迄

職俸　千二百元ヨリ千元迄

航海俸　二千元ヨリ千元迄

右ハスクーチル船ブリツキ船三四等蒸氣船運送船等之一船之指揮を致又リニー船フレガット船等之一等士官ニ御座候

騎兵奉行支配

二十騎兵差圖役頭取　高四百俵　御役料百俵

西洋カピテイン

歳俸　九百元

職俸　千八百元ヨリ千六百元迄

右者一「エスカドロン」隊之指揮を致候

歩兵奉行支配

二十一歩兵差圖役頭取　高四百俵

同上

同

右ハ中隊之指揮を致し候

一歩兵目付役　御役料百五十俵

一歩兵目付役並　同百俵

此二役者差圖役頭取又差圖役より相勤申候

陸軍奉行支配

二十二大砲組差圖役頭取　高四百俵

同上

同

右ハ大砲半座之指揮いたし候

両御番之上　御軍艦奉行支配

二十三御軍艦役並　高三百俵　御役金七十兩

西洋二等ロイテナント

歳俸　七百元ヨリ六百元迄

騎兵奉行支配

二十四騎兵差圖役　高三百俵　御役料百俵

西洋一等ロイテナント

歳俸　六百元

歩兵奉行支配

二十五歩兵差圖役　高三百俵

同上

陸軍奉行支配

二十六大砲組差圖役　高三百俵

同上

職俸　八百元ヨリ六百元迄
航海俸　千六百元ヨリ六百元迄

右各種船之二等士官ニ〜て又小船之將をも相勤候

新御番之上
御軍艦奉行支配
二十七御軍艦役並見習
高貳百五十俵
御役金五十兩
西洋アーデルボルスト
歳俸　五百元
職俸　貳百五十元
航海俸　貳百元

右士官見習ニ御座候

職俸　千三百元ヨリ九百元迄

右兩翼小隊之指揮致〜候
一騎兵目付役
御役料百俵

右差圖役より相勤申候

騎兵奉行支配
二十八騎兵差圖役並
高貳百五十俵
御役料百俵
西洋二等ロイテナント
歳俸　五百元
職俸　千元ヨリ八百元迄

右一「エスカドロン」中等二隊之指揮いた〜候

右小隊之指揮いた〜候

歩兵奉行支配
二十九歩兵差圖役並
高貳百五十俵
同上

右第一級半隊之指揮いた〜候

右半座之指揮いた〜候

陸軍奉行支配
三十大砲組差圖役並
高貳百五十俵
同上

右二挺之指揮いた〜候

下等士官

御鳥見之上　御軍艦頭支配
御軍艦蒸氣方
高百五十俵

御役金八十兩
西洋一等マシヲスト
歳俸　五百元
職俸　六百元
航海俸　一千二百元

御天守番之上
御軍艦頭支配
御軍艦添役取締
高百俵持扶持
役金二十五兩
西洋一等ヲンドルヲヒシール
歳俸　貳百五十元
職俸　四百元
航海俸　七百元ヨリ六百元迄

騎兵頭支配
騎兵目付下役
高百俵持扶持
役金三十兩
當分御手當二十兩
西洋アジュダントヲンドルヲヒシール
歳俸　二百五十元
職俸　三百八十元

騎兵旗役
同断
同断

歩兵頭支配
歩兵目付下役
高百俵持扶持
役金二十兩
同上
同上
同上

歩兵旗役
同断
同断

御徒目付之上
御軍艦頭支配
御軍艦蒸氣方並
高百俵持扶持
役金七十兩